

「記憶」の意味

コメモレイション論と現代

記憶とコメモレイション

——その表象機能をめぐって——

治水の神の誕生

——宝曆薩摩義士と木曾三川流域——

秩父事件顕彰運動と地域

「戦争」を記憶しつづけることの意味

特設部会討論要旨

森村敏己

羽賀祥二

高島千代

石原昌家

記憶とコメモレイション

——その表象機能をめぐって——

森村敏己

はじめに

様々な様式のコメモレイション（記念・顕彰行為）に伴う表象戦略と、それが集合的記憶に及ぼす影響は、「国民国家論」や「戦争の記憶」といった領域に留まらず、文化史とりわけ政治文化研究の観点から長らく注目されてきたといつてよいだろう。モーリス・アギュロンやリン・ハントらの研究はフランス革命から第三共和政期にかけて儀式やシンボルが果たした表象機能の政治的重要性を明らかにしている（Agulhon, 1979, Hunt, 1984）。また、われわれの集合的記憶は決して自生的なものではなく、変容し、再構成されるという点でも共通の認識が成立しているように思われる。昨年、翻訳が出版された『歴史と記憶』においてジャック・ル・ゴフは、記憶の働きは多くの場合、無意識的なものであるだけに操作されやすいとしたうえで、「記憶や忘却を理解し、それらを思考可能な素材に作り変え、それを知の対象とすること」が歴史家の役割だと指摘している（Le Goff, 1988）。

さらに、1984年から92年にかけて出版された7巻からなるピエール・ノラ編集の『記憶の場』が記憶とコメモレイションへの関心を高めたことも間違いない（Nora (éd.), 1984-92）。この作品の日本語訳を準備している谷川稔は、近年の記憶ブームを、忘却され、改竄される「戦争の記憶」やナショナル・アイデンティティの解体といった現実的要請に触発されただけではなく、心性史研究の流れに連なるものとして捉え、『記憶の場』は「集合心性史の領域を一気に拡大した史学史上の大事件」だとしている（谷川稔, 2000）。「共和国」, 「国民」に加え「さまざまなフランス」を第三部とし、しかも編集の過程でこの部分が当初の予定をはるかに越える分量となった経緯を見ても、ノラたちの仕事が単に記憶という観点から国民国家形成史を跡づけるだけのものではなく、なっていることがうかがえる。

報告では、コメモレイションを手段とする集合的記憶の操作をテーマとしながらも、国民共通の記憶とそれを通じたナショナル・アイデンティティの形成ばかりでなく、コメモレイションが伝達しようとする「意味」の受容に伴う抵抗や読み替えに関わる問題にも言及したい。コメモレイションが示す表象はいわば真空状態の中で機能するわけではなく、われわれの集合的記憶もまた一方的に操作されるだけの受動的存在ではないのである。

I 記憶の選択に伴う問題

エルネスト・ルナンは『国民とは何か』において記憶と忘却の問題を論じている。「国民とは日々の人民投票である」という一節が一人歩きし、ルナンが国民国家への帰属の根拠を住民の意思に求めていたと解釈し、「多文化主義的な社会の統合原理」をそこに見いだそうとすることが誤読であることは鵜飼哲が指摘するとおりであり（鵜飼哲, 1997）、ルナンはむしろ19世紀の段階で「国民」という概念が忘却と歴史的誤謬に基づくことを積極的に認めている。そのうえで国民という「精神的原理」を構成するのは、過去については「豊かな記憶の遺産の共有」、現在に関しては「現在の同意」、「ともに生活しようとする願望」であり、「国民とは……人々が過去においてなし、今後もなす用意のある犠牲の感情によって構成された大いなる連帯心」だとしている。いわば「日々の人民投票」は記憶の共有という条件、しかも忘却と歴史的誤謬に立脚するとルナン自らが認める条件によって、自由な意志による参加という性格を欠いている。ルナンは国民意識の形成が記憶の操作に基づいていることに極めて自覚的であったといえよう。

しかし、記憶に留めるべき過去、忘却すべき過去の選択は必ずしも容易ではない。選択は時として対立や亀裂を招くことになる。むしろ、何の議論も呼ぶことなく平穩に選択がなされるとすれば、それは特定の過去を表象することで諸集団を統合する必要性、あるいは敵対する表象を排除する理由自体が存在しないことになる。表象しようとする「過去」に対抗する「過去」が存在するからこそ、選択が、換言すれば対抗記憶の排除が求められるのである。

排除や忘却と一体のものである選択は実に多様な対象をめぐって行われる。革命期に撤去され、王政復古期に再建される国王たちの像（Hargrove, 1986）, 「人権」, 「団結」, 「理性」といった革命の理念を表す言葉から、ナポレオン麾下の将軍の名前に、そして国王や聖人たちの名の復活へと次々と変更されるパリの通りの名称（Milo, 1986）, これらはいずれも当時の政府が「正当な過去」として提示しようとしたものが何であったかを明瞭に物語っている。

また、フランス国旗として知られる三色旗も、王家の白、 Kommunismusの赤との対抗、両者の排除を経て、革命の遺産を引き継ぐ第三共和政の正統性を象徴するものとなった（Girardet, 1984）。言い換えれば、三色旗をめぐる抗争は権力争いそのものであるとともに、革命という「過去」を「正当な」フランス史の中にどう位置づけるかを問う闘いでもあった。革命当初から三色は旗以外に帽子に付ける徽章にも用いられており、早くから革命の象徴としての役割を確立していた。リン・ハントによればパリの女性たちがヴェルサイユに押し掛け、国王一家をパリに連行した「ヴェルサイユ事件」は、国王が三色徽章を侮辱したという噂によって突如引き起こされたという（Hunt, 1984）。この事件は三色のもつ政治的意味の重要性、そして表象に備わる影響力の大きさを端的に示していると言えるだろう。

一方、深刻な社会的亀裂が予測されるために選択が難しい場合もある。フランスの歴史を飾る偉人を祀る役割を与えられたパンテオンは国民的統合の場として構想されたが、革命以前の偉人で結局パンテオンに移送されたのはヴォルテールとルソーのみであったし、革命家にはこの場に眠りつづけることに成功した例はない。ある人物のパンテオンへの移送は必ず政治的対立を激化させるのである（Ozouf, 1984）。

1880年に国民祝祭の日として「7月14日」を選択したのも、予想される対立、亀裂を防ぐためであったとされる。候補となる日はいくらでもあった。5月5日（三部会開催）、6月20日（球技場での誓い）、8月10日（封建制廃止決議）、いずれも祝祭となる資格は備えているし、共和国を強調したいのであれば8月10日（王権停止）や1月21日（ルイ16世処刑）という選択もあり得ただろう。こうした中で7月14日が選ばれたのは、この日がバスチーユ襲撃の日であったばかりでなく、翌年に実施された「連盟祭」の日でもあり、国民の友愛と愛国心を象徴することが可能であったことによる。自らの基盤の安定を求める第三共和政にとって7月14日はもっとも社会的対立を顕在化させない日付だったのである（Amalvi, 1984, 工藤光一, 2000）。

これまでに挙げた例では、選択された表象の意味

に関しては共通の理解が成立しており、解釈上の対立はないといってよい。逆に、選択それ自体に異論は生じなくても、解釈をめぐる対立が深まる場合もある。1878年にヴォルテール没後100年が共和派によって祝われたとき、ヴォルテールにまつわる神話、すなわち「革命の父」であり、「啓蒙」、「革命」、「共和国」を一本の糸で結びつける人物という「神話」（この神話は王党派にも共有されている。それだけに彼らにとってヴォルテールはルソーと並んで不幸の元凶であった）に対抗する神話として王党派が担ぎ出したのはジャンヌ・ダルクであった。もちろん、彼らの意図は敬虔なカトリック、シャルル7世の戴冠に献身したヒロインとしてのジャンヌに自らのイデオロギーを投影することであったが、彼女はフランスの統一に貢献した愛国者として表象することも可能な存在であった。共和派は王党派のシンボルとして持ち出されたジャンヌの神話を排除するのではなく、取り込むことで王党派に対抗する（Goulemot & Walter, 1984. Harglove, 1992）。このため、ジャンヌの銅像は共和派、王党派それぞれに異なる思惑を込められながら、この時期、多く建立されることになる。この事例は選択ではなく解釈をめぐる対立を示すものだが、ある意味では「神話」と「対抗神話」の対立を無化させてしまう共和派の巧妙さを表しているともいえよう。

II 受容をめぐる問題

「伝統の創造」や「想像の共同体」は絶えず現実的な条件との葛藤を前提に生み出される。白紙に自由に絵を描くように集合的記憶を捏造することは不可能であり、その際、もっとも配慮すべき条件は、対立する権力よりもむしろ受容者側の独自の表象体系・文化であろう。これに真っ向から対立し、完全に消滅させようとするには大きな困難がつかまとう。このため、表象を押しつけようとする権力主体は受容者の反応を前提とした表象戦略を採らざるを得ない。こうした戦略は受容者の独自の文化の取り込み、変容、歪曲などを含むことになるが、その一方で受容者側も与えられた表象を権力側の意図とは別の形に読み替え、その意味をずらし、時には風化させていく。表象の受容をめぐるコメモレイ

ションの主催者と参加者あるいは傍観者は、互いに影響を与えあい、変質しあいながら、時に対立し、時に融合するという、複雑でダイナミックな関係を取り結ぶことになる。

再び7月14日を例に取ろう。第三共和政下のこの祝祭が成功した大きな要因は、広範な民衆層の自発的な参加であったが、それを可能にしたのは公式行事を午前中に限り、午後を遊びや娯楽に当てた主催者側の配慮にあったとされる（Amalvi, 1984）。自らの権力の正統性を象徴するイデオロギーをこり押しすることを避け、とにかく国民全員が参加し、共有できる祝祭を演出することを優先した共和派の作戦が功を奏したといえる。ただし、祝祭における民衆娯楽に関しては異なる立場もある。アメリカにおける公式行事を研究したボドナーは逆に、民衆が祝祭の神聖な意味を理解せず、娯楽の日として過ごすことを主催者が不快に感じる例を報告しており、彼はむしろこうした例を民衆によるある種の抵抗として位置づけている（Bodner, 1992）。

もちろん、権力による民衆の表象の取り込みを、単に戦術的妥協とばかり見なすことはできない。革命期に盛んに植えられた「自由の木」は、農民たちの領主への反抗の際に植えられた木を起源としており、革命政府は当初これを反抗のシンボルとして危険視していたが、やがて「自由の木」が革命への賛同のシンボルとして広く普及するようになると、政府は自由の木の植樹を公式行事として自ら取り込む。こうして「自由の木」は民衆の自発的な表象から公的な表象へとその意味を変更され、政府に統御され、規制されるものへと変質すると同時に、権力への反抗という、政府にとって危険な意味を剝奪されるのである（Hunt, 1984）。

一方でハントは政府が行うコメモレイションへの積極的反抗の例も伝えている。モーリス・アギユロンの研究により有名な共和国を表象する「マリアンヌ」とは1792年に共和国の印章の図柄として選ばれた「自由の女神」像のニックネームだが、この女神像を用いた革命の表象戦略は、木製の黒い聖母像という対抗する表象の挑戦を受ける。長い宗教的・民衆的伝統に支えられた聖母像を持ち出すことは、非キリスト教化を進める革命と共和国へのあからさま

な反抗の意思表示であった（Hunt, 1984）。

マリアンヌは結果的に革命後も生き残り、共和国の伝統を体現し、根付いていくことになるが、革命が発明し、押しつけようとしながら失敗した例もある。たとえば共和暦はいわば時間さえも新たな理念のもとに従属させようとする試みであったといえるが、それだけに長く続いた伝統との摩擦は当然ながら大きい。1793年10月5日に採択されたこの暦は各月に「花」や「風」、「霧」など季節感を表す名称を付け、一週間に代えて10日を単位とし、休日は10日に一度、ひと月は30日からなり、一年は12ヶ月に5日ないしは6日の閏日を加える、というものであった。この暦の採用に伴い、当然、従来の宗教的な祭日はもとより日曜日も廃止されることになった。提案者の意図は十進法に基づく合理的な時間の支配と革命による旧体制との断絶を徴づけることにあったとされるが、予想どおり、人々は旧来のリズムに執着し、共和暦は執拗な抵抗を受ける。政府は弾圧によってまで10日毎の休日を遵守させようとしたが、結局、この暦は1806年に廃止された。オズーフによれば、「驚くべきは共和暦が消滅した事実ではなしに、その最期の到来がきわめて緩慢だった」ことだとされる（Ozouf, 1988）。時間の観念といった人々の生活に密着したもののまでも新たな表象を押しつけることで変更しようとした試みは、全く新しい秩序を作り出そうとする強烈な意志を示すものだが、受容者の文化をこれほど無視した例も少ない。失敗は当然であり、ミシェル・ヴォヴェルが伝える次のエピソードは共和暦の浸透力の実体を如実に伝えている。それによれば共和暦8年に捕えられたある放浪者は、いつからさまよっているのかという問いに、「あの寒い冬のあった年から」と答えたという（Vovelle, 1985）。

最期に単なる受容でも抵抗でもなく、与えられた意味が読み替えられ、ずらされていくという現象に注目したい。

実在の人物であってもジャンヌ・ダルクの場合がそうであったように、その人間が表象する意味の解釈については常に合意が成立しているわけではない。まして、抽象的な理念を表現する銅像や絵画に関しては、それが表象する意味を思惑どおりに受容させ

ることは困難だといってよいだろう。もちろん、像を提示する側は演説や碑文といった言語を用いて伝えるべき意味を固定し、「正しい」理解を教え込もうとする。しかし、見るものは必ず銅像の土台に刻まれた文字を読み、その意味を把握した上で像を眺めるわけではないし、言語による解釈の誘導と固定化が常に可能なわけでもない。このため、非言語的表現である銅像や絵画は受容者によって独自の解釈を施される危険が大きい。このことはすべてのコメモレイションに共通する特性であるといえる。表象が与えるインパクトは強烈であり、その影響力、動員力は時として言語をはるかに凌駕するとはいえず、その代償としてコメモレイションが伝えようとする表象は常に誤読される可能性が高い。

たとえば「自由の女神」は何を表象するのか。「自由」という答えは、表象を持ち出した意図を示すものではあっても、見るものが何を讀みとったかという問題への解答とはなりえない。シャルル10世を追放し、7月王政を樹立した当初、「自由の女神」像はシャルルへの批判、そして新国王ルイ・フィリップへの支持を表すものであったが、やがて7月王政への批判のシンボルへとその意味を変えていった。それは本来、「自由」の表象であったはずのこの女神が、革命の記憶の中で「共和国」と固く結びつき、「自由」よりもむしろ「共和国」の表象へとその意味を変化させていったことによる。「自由」の表象であれば、7月王政は自らを王政復古期の反動的な体制と区別し、自由な政治体制であることをアピールするための格好のシンボルとして利用しつづけることができたであろう。しかし、「自由」ばかりか、「正義」を表象するものであれ、「知恵」を表すものであれ、女神像でさえあれば「自由の女神」であり「共和国」の寓意だと解釈する民衆に対して、ルイ・フィリップの政府はこの表象を用いることには慎重にならざるを得ない（Agulhon, 1979）。

この場合は表象が提示された時点でその意味が誤読される例だが、その一方で長い歳月を経て当初意図された意味が風化していく場合もある。イギリスでは11月5日に「ガイ・フォースク・デイ」と呼ばれる祭りが行われているが、400年も続くこの祭

の起源は当時の露骨な政治的意図に添ったものであった。1605年11月5日、国王ジェームズと議会を標的とした火薬陰謀事件が発覚し、犯行を企てたカトリック教徒が逮捕される。翌年議会はこの日を神に感謝する「記念日」に指定するが、見市雅俊によればこの祝祭はカトリックによる陰謀とそれに対する勝利を強調し、反カトリックを国民結集の軸とするために創設されたものであった（見市雅俊，1999）。しかし、「反カトリック」というスローガンは新旧両派の間で揺れ動く17世紀のイギリスにおいては重要な政治的意味をもっただろうが、当然、時間の経緯とともにそのメッセージ性は薄れていく。今ではこの祭りは政治色・宗教色の抜け落ちた単なる娯楽として生き延びている。

コメモレイションの意味は主催者が意図した思惑と、受容者による独自の読みとの複雑な相互作用によって成立し、変容する。この独自の読み（アプロプリアション）の実体は主催者の意図に比べて実証的に解明することが困難であるが、コメモレイションの表象機能を考察する上で、もっとも重要な要因のひとつであることは確かであろう。

III ローカルな記憶の「創造」

国民国家のみが創造されたものであり、ローカルな集団の記憶は自生的、本質的あるいは非抑圧的と考え、これを理想化することはナイーヴな見方といってよい。この点はベネディクト・アンダーソン自身が強調している。彼によれば「創造」された国民国家とは別のところに、より「真実」な共同体が存在するわけではない（Anderson, 1991）。人為的に捏造された国民国家とこれを支える「作られた」ナショナルな記憶、それへの対抗軸として機能する自生的なローカル集団と加工されていない「無垢な」記憶。こうした対比は国民国家を批判するための戦術としては有効かもしれないが、説得力を欠く。ローカルな記憶、周縁的な記憶、マイナーな記憶、名称はどうあれこうした記憶もまた変容と再構成を免れることはできない。また、ローカルな記憶が国民的記憶の成立によって常に周辺に追いやられ、消滅するとも限らない。両者の関係はより複雑である。

阿部安成は横浜開港50周年記念行事を分析する中

で、興味深い事実を指摘している。当時の新聞は、それまで貧しい寒村に過ぎなかった横浜が開港によって「世界に名だたる貿易港都」へと飛躍を遂げたと書き立てるが、この言説は近代国家日本の発展を強調する言説と重なりあう形で展開される。つまり、「横浜」の飛躍は「近代日本」の発展と平行関係に置かれ、「横浜市民」であることと「日本国民」であることに齟齬や緊張関係は見られない。そればかりか、開港以前からこの地に住み、いわば開港・発展とは異なる記憶を語りうるはずの「古老」もまたこの枠組みに添った形で自らの思い出を回顧してしまうのである（阿部安成，1999）。明らかにここでは、横浜は国民国家に対抗しうるローカルな場としての資格を奪われている。というよりも、横浜という地のローカル・アイデンティティそのものが、近代日本のナショナル・アイデンティティに寄り添い、これと親和的に形成されているとあってよいだろう。

一方、横浜とは対照的ながら、やはりナショナル・アイデンティティの形成と一体となったローカル・アイデンティティの成立の例を示しているのがヴァンデ地方である。フランス革命期に生じたこの地方の反乱は、一時は共和国軍を打ち破る勢いを見せ、諸々の反革命的騒擾の中でも特別の位置を占めている。旧体制との断絶、革命による新たなフランスの建設を目指す政府は、この反乱を貧しく無知で迷信的な農民たちが、聖職者と貴族に操られた結果と断じ、ヴァンデを抹殺すべき反革命の象徴としていった。逆にヴァンデの住人たちも革命政府が作り出したイメージを利用し、敬虔で墮落を免れた最後のフランス人、無垢な農民としてのアイデンティティを確立していく。ところが、ヴァンデと総称されるこの地方は実は経済的にも地形的にも決して一様ではなく、内戦が始まるまでは統一的なアイデンティティをもつひとつの地方ではなかった（Martin, 1984）。フランス革命が押し進めたナショナル・アイデンティティの形成が初めて、これに対抗するものとしてのヴァンデのローカル・アイデンティティを生み出したのであり、ヴァンデ軍と共和国軍との戦争は、既存のローカル・アイデンティティとこれを押し潰そうとするナショナル・アイデ

ンティティとの闘争ではなかったのである。

最後に、形成されたローカル・アイデンティティがその後の集団的記憶を規定していった例として、ゼヴェンヌ地方を取り上げたい。この地は18世紀の初頭にカミザールの乱と呼ばれるプロテスタントによる反乱が起こり、徹底的な弾圧を受けた過去を持つ。オーラル・ヒストリーの手法を用いてゼヴェンヌの集団的記憶を調査したフィリップ・ジュタールによれば、この地方の住人たちはカミザールの経験から「自由を愛し、独立を求める」セヴェンヌ人というイメージを作り上げ、たとえカミザールとは関わりのない事件であってもカミザールの記憶として語り継ぎ、またこうした自己イメージはその後のこの地の政治的態度も規定しているという（Joutard, 1977）。工藤光一は「国民的記憶」に対して「ずれをもたらず記憶」としてこの事例に注目しているが（工藤光一，2000）、それと同時にゼヴェンヌ地方の記憶の伝承のあり方は、ローカルな記憶が決して歪曲や加工を免れ、「純粋さ」を保持している存在ではないことを示すものとして理解することも可能だろう。

ナショナルな記憶ばかりでなく、ローカルな記憶もまた、住民のアイデンティティを支えるものとしての地位を固めていく過程で忘却を伴っている。先に触れたヴァンデでは確かに徹底した弾圧が加えられ、戦闘員の多くが一般の民衆であったことも手伝って虐殺の記憶は根強い。こうして共和国軍のヴァンデ住民への残虐さが強調される一方で、ヴァンデ軍による虐殺行為は隠蔽される。内戦中、残虐行為は双方に存在したはずだが、ヴァンデの集団的記憶の中では、ヴァンデ軍の指導者は寛大で、この地の貴族は高貴な人々であったとされる（Vovelle, 1985）。

また、同じく革命期に反乱を起こしたブルターニュ地方のモルビアン県に関する調査によれば、この県には乱による犠牲者を悼む供養墓が18残存しており、どちらの陣営に属した人物の墓であるかも判明している。内訳は王党派が10に対して革命派の墓が8であり、若干、王党派が多いとはいえ、決定的な差とはいえず、この地がもっぱら党派的な観点から反革命派の死だけを悼んだ、とはいいがたい。し

かし、問題は革命派とされる人物の死にまつわるエピソードである。王党派に殺害された兵士のポケットからはロザリオが発見されたというのである（大庭幸子，1999）。カトリック改革が成功し、「良き司祭」の伝統が息づき、聖職者と住民の間に緊密な関係が存在したとされるこの地方において、ロザリオの発見は決定的な意味を持つ。すなわち革命派の兵士は憎むべき「敵」から、「良きカトリック教徒」すわなち心の奥底では同じ信仰をもつ仲間へとその意味を変えてしまうのである。ロザリオにまつわるエピソードが事実なのか、後世の脚色なのかは不明だが、モルビアン県の住人たちが、死んだ者たちを自らのアイデンティティに寄り添う形で記憶しようとしたことは疑いない。

むすび

表象、記憶といった観点から歴史を考察することは決して事実の調査を軽視することではないし、文化史の登場は経済史や制度史を無用にしたわけではない。しかし逆に、個人であれ集団であれ、自らをどのように思い描き、規定するかという問題、言い換えれば自己表象のあり方が、社会的現実から直線的に導かれるものでもないだろう。現実とその現実を生きた人々がこれをどう意味づけたかというふたつの問題は排除しあうものではなく、むしろ相互補完的な関係にあるものと理解すべきであろう（Le Goff, 1988, Chartier, 1989）。コメモレイション研究も表象というテーマに焦点を当てることで、記憶という個人的、内面的と思われがちな要素の社会的、歴史的機能を明らかにすることが目的であり、「事実」の不可知性や相対主義を主張するものではない。

『記憶の場』の編者ノラは記憶をめぐるフランス国民の変化を分析している。それによればヨーロッパ統合、生活様式の普遍化、非中央集権化、移民の増加、大国の地位からの転落などによって、フランスにおいては「権力」、「国民」、「国家」の結びつきはすでに解体しており、「国民」への帰属意識を支えているのはもはや伝統的ナショナリズムではない。そのため革命200年記念においても国家は指導力を失い、コメモレイションのイニシアティヴは個々のグループの手に移ったとされている（Nora, 1986、

1992)。また、ジャック・ルヴェルもアイデンティティの確認、連続性の保証、運命の共同性の強調という3つの役割を担っていたネーションの物語としての歴史は力を失い、ナショナル・アイデンティティは今や自明ではなく、問われるべき存在になったと論じている。(ルヴェル, 1996)。

こうした分析がどの程度、的確なのか、またフランス以外の国々でどれほど妥当性をもつのか判断するのは困難だが、少なくとも日本においては国家による集団的記憶の操作は目に見えるかたちで進行している。ジャック・ル・ゴフは集合的記憶が権力の道具であることを自覚するように求め、「社会的記憶の民主化のための戦い」を提唱しているが(Le Goff, 1988), そのためには「公的」な記憶に対抗する記憶を掘り起こすことはもちろん必要だが、それに留まらず、特定の記憶が「公的」な地位を要求すること自体への懐疑が必要であろう。いずれかの記憶が「公的」なものであり、それ以外は忘却されるべき記憶、あるいは周辺に追いやられ、私的にのみ保持される記憶という図式が続く限り、「公的」記憶を名乗るもろもろの記憶による「神々の争い」は終わらない。コメモレイション研究はこうした図式自体を相対化することを可能にするだろう。

【参考文献】

- Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities*, Revised Edition, Verso. (白石さや・白石隆訳『想像の共同体』, NTT出版, 1997年)
- Agulhon, Maurice (1979) *Marianne au combat*, Flammarion. (阿河雄二郎他訳『フランス共和国の肖像』ミネルヴァ書房, 1989年)
- Bodner, John (1992) *Remaking America: public memory, commemoration, and patriotism in the twentieth century*, Princeton UP. (野村達朗他訳『鎮魂と祝祭のアメリカ』青木書店, 1997年)
- Chartier, Roger (1989) "Le monde comme représentation", *Annales E. S. C.*, 1989, no. 6. (二宮宏之訳「表象としての世界」『思想』812号, 1992年2月)
- Hunt, Lynn (1984) *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*, University of California

Press. (松浦義弘訳『フランス革命の政治文化』平凡社, 1989年)

Joutard, Philippe (1977) *La légende des Camisards: une sensibilité au passé*, Gallimard.

Le Goff, Jacques, 1988. *Histoire et mémoire*, Gallimard. (立川孝一訳『歴史と記憶』, 法政大学出版社, 1999年)

Amalvi, Christian (1984) "Le 14-Juillet".

Girard, Raoul (1984) "Les Trois Couleurs".

Goulemot, Jean-Marie & Walter, Eric (1984) "Les centenaire de Voltaire et de Rousseau".

Hargrove, June (1986) "Les statues de Paris".

Martin, Jean-Clément (1984) "La Vendée, région-mémoire".

Milo, Daniel (1986) "Le nom des rues".

Nora, Pierre (1986) "La Nation-Mémoire".

ditto (1992) "L'ère de la commémoration".

Ozouf, Mona (1984) "Panthéon".

*以上9点は Nora, Pierre (éd.), *Les lieux de mémoire*, Gallimard, 1984-92. に収録。

Ozouf, Mona (1988) "Calendrier", Furet, François & Ozouf, Mona (éd.), *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Flammarion. (河野健二他監訳『フランス革命事典』I, みすず書房, 1995年)

Vovelle, Michel (1985) *La mentalité révolutionnaire*, Messidor/Éditions Sociales. (立川孝一他訳『フランス革命の心性』岩波書店, 1992年)

ルヴェル, ジャック (1996) 「記憶の重荷」『思想』866号, 1996年8月

鶴飼哲 (1997) 「国民人間主義のリミット」, ルナン他『国民とは何か』, 河出書房新社

阿部安成 (1999) 「横浜歴史という履歴の書法」

見市雅俊 (1999) 「火薬陰謀事件を忘れるな！」

*以上2点は阿部安成他編『記憶のかたち』, 柏書房に収録。

大庭幸子 (1999) 「フランス革命とプルターニュの民衆文化——モルビアン県における『反革命』の様相」九州西洋史学会『西洋史学論集』第37号

工藤光一 (2000) 「記憶の不協和音としての『共和政』——『共和政フランス』と集合的記憶」

『Quadrante (クアドランテ)』no. 2, 2000年3月
谷川稔 (2000) 「社会史の万華鏡——『記憶の場』の読み方・読まれ方」『思想』911号, 2000年5月